

桃の極早生品種「ひめこなつ」

開花後60日で収穫できる極早生品種の桃の紹介をします。

「ひめこなつ」は、5月末から6月上旬に収穫できる桃の極早生品種で、その存在を知ったのは2008年、テレビの天気予報の季節情報コーナーでした。幼稚園児らしい子どもが赤く色づいた桃を食べ、「おいしい」と無邪気な歓声を上げている様子が放映されていました。

この瞬間、「あ、これだと」という直感と栽培への期待が交差する喜びを体験しました。早速、取引のある種苗会社に連絡を取ったところ、まだ苗木の販売がされたばかりで、それから2年ほど過ぎた2010年2月に25本の苗木を取り寄せることができました。花の開花からおよそ60日後には、収穫できる「ひめこなつ」に期待が膨らむばかりでした。

私自身の桃の栽培歴は、親の代から通算すると約40年です。これまで6月下旬から7月下旬にかけ、布目や倉方、白鳳などの品種を栽培してきました。しかし、7月に入ると桃の実が腐る「灰星病」が多発するため、15年ほど前からその発生が比較的少ない6月中に収穫できる「ちよひめ」という品種に切り替えたことで、比較的安定した桃栽培の技術体系が確立できました。

桃の一品種の収穫期間は、概ね10日から14日程度のため、常々「ちよひめ」より早く収穫できる、甘みのある極早生品種の出現を待望し、関係者と情報収集を図っていました。取り寄せた「ひめこなつ」25本を新たに用意した15aの畑に植栽したところ、2011年6月には樹高約2m50cmに育ち、1本の桃の木に平均50個を着果させ、同月5日から15日に収穫を終了しました。



植え付け1年後の「ひめこなつ」樹高約2m50cm

桃の果実の大きさは、1個約120gと小ぶりですが、どの品種よりも早く収穫でき、平均糖度は12%を示し、食べた人からは、「甘くておいしい」と好評でした。桃の果実の色づきを促すため、反射シートを桃畑に敷くことが、一般的な栽培技術ですが、この「ひめこなつ」は、陽が余り当たらない中枝や下枝に着いた果実まで赤く色づくことで反射シートの必要性は一切ありません。



撮影日2011年6月5日

当然、袋は掛けない無袋栽培で、より省力的な栽培技術でも収穫できます。また、病虫害防除のための農薬散布については、2月、4月、5月の計3回で十分です。以上が「ひめこなつ」の特性及び経験的な栽培マニュアルです。

直売所などでの販売金額は6個詰め1パック、ワンコイン500円で販売したいと考えています。果実は小ぶりですが、甘く、色合いも良い点で消費者にも納得していただけるのではないのでしょうか。



「ひめこなつ」のパック詰め

果樹類については、多くの農家が苗木を植えた翌年からそれなりの収穫ができるとは想像していないでしょう。今年の2月に神奈川県J A 秦野から講演依頼があり、「花による地域おこし・花トピア」と題する講演会の中で「ひめこなつ」を紹介した秦野市の菖蒲地区の委員さんらも当初はこの桃には半信半疑であったと思います。しかし、まずは、花でも咲けばとの思いで、3月に種苗会社にあった「ひめこなつ」100本と「ちよひめ」20本を菖蒲地区で購入し、植え付けも終了させました。

私が植えた「ひめこなつ」については、5月に桃の果実を大きくするため、実の数を減らす作業「摘果」をしたところ、小さな実でも既にうっすらと赤く色づいており、試しに食べたところ、まずまずの甘みがあったため、これは期待できると思えました。期待通り、6月5日には、糖度12%の「ひめこなつ」の収穫ができ、同月15日に秦野市の菖蒲地区の委員さんら（70歳前後）を招き、私の桃畑の「ひめこなつ」を視察していただきました。（写真）。その時の感想が「これなら我々シルバー世代でもチャレンジできる、仲間を増やし産地化を目指そう」ということでした。そして、「摘果」した実は「果実酒にしよう」、夏の葉は「あせもに効く桃の葉湯の葉で売ろう」などと夢は膨らむばかりでした。



秦野市の菖蒲地区の委員さんらが視察

春は桃の花の桃源郷を創出させ、そして果実酒づくり、初夏は桃の実の販売、盛夏は桃の葉湯の葉を販売するなど、「ひめこなつ」と「ちよひめ」をセットにした極早生桃の産地が、シルバー世代により誕生する日がすぐそこに見えるようです。もちろん新規で農業にチャレンジする方にもお勧めの極早生品種です。

神奈川県南足柄市 古屋 富雄